【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	長　野　県

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	駒ヶ根市立赤穂東小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	３	３	３	３	３	２	２	１９	28.5
児童数	８９	８３	８５	９４	９８	７１	６	５２６	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

子どもが意欲をもって追究する授業
～確かな学力の定着をめざして～

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

・４・５・６年生・算数
習熟の程度に大きな差異が生じていて，同一の学習問題，学習展開では追究意欲・学習態度に顕著な違いが見られるため。
・４・５・６年生・国語
読むこと・書くこと・話すこと等に児童の興味・関心のちがい，技能のちがいが生じてきているため。

(2)　年次ごとの計画

平成15年度

○テーマ『意欲をもって追究する授業』～確かな学力の定着をめざして～
※国語科研究テーマ
国語科における効果的な少人数学習はどうあったらよいか
～言葉を知り，漢字を読んだり書いたりすることが，楽しくなる指導のあり方～
※算数科研究テーマ
一人ひとりが意欲をもって追究し「わかる」「できる」「使える」ための支援はどうあったらよいか
～実態に応じた各コースの指導法のあり方～

○研究の見通し
※国語科では学習内容と児童の実態に応じて学習集団を柔軟に編成し，課題別少人数学習，習熟度別少人数学習を取り入れつつ，個に応じた指導が展開できるよう工夫していく。
※算数科では習熟度別少人数学習を中心にしながら，各コースごとの単元展開の工夫や発展的教材の開発を進めていく。

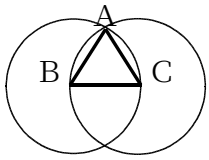
○研究の内容・方法
１国語科におけるより柔軟な少人数学習集団の構成
①習熟度（言語の力）別による少人数学習の試み
・コースは，大きく２グループに分け，それを４つの学習集団にする。
・基礎的な事項をゆっくり，じっくり確かめながら学習を進めるグループ（じっくりグループ）と基礎的な部分については一通り学習し，その後，発展的に学習を進めるグループ（たっぷりグループ）にする。
・選択の方法はあくまでも，児童の希望を最優先に考えグループを決める。必要に応じて教師が助言する。
・グループ内の学習集団については，同じクラスの児童ばかりが１つに固まらないよう配慮する。
・単元ごと，児童の希望によりグループの変更も可能とする。
・保護者には，５月の学級懇談会の折り趣旨説明を行う。１学期に算数

（習熟度別），２学期に国語で授業参観の機会を設ける。
・扱う単元（教材）は，基本的には「言語」に関する単元で実施する。
②課題別少人数学習の試み
・課題別（テーマ別）の学習集団は，単元のねらいや児童の願いをもとに構成する。
・単元展開の手だてとして，相手（目的）意識を持つ　→個人の願いを設定する　→課題（テーマ）別少人数学習集団を編成する　→同じ願いを実現するための必要感に迫られた情報交換（話しあい）の場を設定する。
③年度当初に学習方法（形態）を模索しつつ，年間指導計画を立案する。

２算数科における指導方法・指導体制の工夫
①発展的教材の開発
・５年　単元「小数のかけ算・わり算（２）」発展コース

□÷ 5 ÷ 0.2 と□÷ 0.4 ÷ 2.5 の答えがなぜ□になるのか考える場面
☆既習の小数の乗除を用いながら，２数の関係に着目することを通して，除数の積が１であることを見いだし，他の数の場合でも成り立つことを理解する。

・４年　単元「三角形」発展コース



点Ｂ，Ｃはそれぞれの円の中心。点Ａ，Ｂ，Ｃを直線で結ぶと何という三角形ができるか考える場面
☆△ＡＢＣが，正三角形であることを予想した子ども達が，円の定義を用いて，円の半径がどこでも等しいことを自分なりの言葉で説明しながら，正三角形であることを見いだしていく。

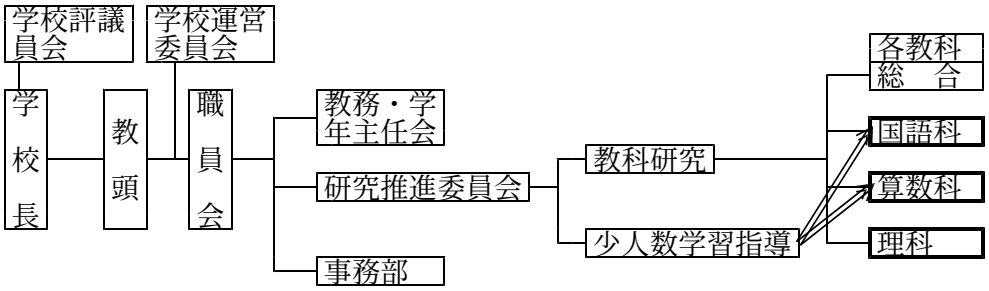
・４年　単元「角の大きさ」発展コース

三角形の角の大きさを分度器を用いて測定していく場面
☆３つの角の和が 180 度になることに気づき始めた子ども達が，たくさんの三角形を書き，すべての三角形の角を測定して 180 度になることをつかんでいく。最後に３つの角に色をつけると，操作しながら３つの角を並べて一直線になる（180 度である）ことを確かめていく（驚きとともに）。

② 追究場面における支援のあり方
・「わかる」「できる」「使える」段階におけるより的確な支援のあり方を子どもの学びの姿から探り，学力の定着に向けた指導に生かしていく。
③習熟度に応じた単元展開や学習方法の工夫
・各コースごとの１時間の大まかな流れを基に児童の実態に合わせて単元展開を工夫し，子ども達の力を伸ばす。
３確かな学力定着のための個別指導の時間の確保と家庭学習の充実に向けた取組
①金曜６校時に全校（３年生以上）一斉に学裁の時間を位置づけ，国語算数の基礎学力定着に向けた個別指導の時間として確保。担任，専科教員等を含め全校体制で取り組んでいる。
②家庭学習の習慣化を図るために，国語・算数を中心とした課題を毎日出している。基礎的な学力の定着をねらった漢字・音読・計算等が中心であるが，次第に子ども自らが考えて取り組めるよう指導している。

平成16年度	○テーマ『意欲をもって追究する授業』～確かな学力の定着をめざして～ ○研究の見通し ・算数科における発展的な教材開発を図る。 ・課題別・習熟度別少人数学習のあり方を探る。 ○研究の内容・方法 ・日々の授業にあらわれた子どもの学びの姿から，確かな学力定着に向けた支援のあり方を探っていく。 ・学力実態調査結果の比較と分析から，児童の実態を探る。 ・個別指導の時間の確保と指導体制の確立を図る。 ・家庭学習の習慣化を図るために保護者と連携しながら進めていく。

(3)　研究推進体制



・教科研究の重点に少人数学習指導を位置づけ，全職員が一体となって関わっていけるようにした。
・少人数学習指導の実際を学校評議員が参観する機会を設け，意見や要望等を寄せてもらいながら指導に生かしていけるようにしている。

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

・児童に行ったアンケートで，「学級で行う授業と比べて勉強の内容がよくわかる」に「よくあてはまる」，「ほぼよくあてはまる」と答えた児童は算数で，４年生 88%，５年生 79%，国語で４年生 75%，５年生 77%となっている。約８割の児童が少人数学習を肯定的に捉えている。
・言語に関わる単元での習熟度別少人数学習は効果的であることが，児童の学びの姿から見えてきた。児童の実態がほぼ等しくなることで，授業展開や手だてが工夫しやすくなってきている。
・算数における少人数学習は習熟度を基本としながら進めていくことが，より効果的である。
・昨年度末（H15.2)に行った学力実態調査の分析から，本校児童の実態を分析し研究の方向を決めだしてきた。今年度も 2 月に行う学力検査ＣＲＴを基に学力の定着状況を比較検討し，次年度へつなげていく。
・基礎学力の定着を願い火曜日朝の活動時間と金曜日の６校時にドリルやプリントを中心にした学習を行っている。更に，５年生では今年度作成したプリントによる自己学習も進めている（引き続き４年生，６年生にも推進していく)。
・少人数学習の推進により，学級という枠組みが外されてくるとともに，教師自身の意識改革が図られてきた。

２．今後の課題

・発展コースの子ども達の力をより伸ばしていくための教材を開発していく。その際，どの部分の力を伸ばしていきたいかを明確にしておく。
・個別指導の時間（金曜日第６校時，３年生以上で一斉に実施）の充実を図り，一人ひとりに確かな学力が付くようにしていく。発展コースの児童は自己学習力の向上を，基礎コースの児童には，手の空いている教師による１対１対応で，不十分な箇所を補っていく指導体制を確立していく。
・生活面で問題を抱える児童の家庭学習のあり方について，保護者との連絡を密にしながら改善していく。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

・小中学校学力実態調査（平成 12 年度県教委）国語・算数，１月末：各年度における学力の定着状況を比較・分析するため
・小中学校学力実態調査（平成 15 年度県教委）国語・算数，11 月実施：今年度の児童の実態把握・分析のため
・学力検査ＣＲＴ　国語・算数，２月実施：児童の実態調査と個に応じた指導を図るため

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・ＨＰに少人数学習指導の授業風景や指導方法等を掲載する予定（３月末）
・保護者への授業公開
4 月：5 年算数，5 月：4 年算数，10 月学校開放参観：4 年国語，6 年算数，
11 月：5 年国語，
・学校評議員会(12 月）の中で授業の様子を公開

◇　次の項目ごとに，該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　☑ １５年度からの新規校　□ １４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級
□１３～１８学級　☑ １９～２４学級
□２５学級以上

【指導体制】　☑ 少人数指導　□ Ｔ．Ｔによる指導
☑ 一部教科担任制　□ その他

【研究教科】　☑ 国語　□ 社会　☑ 算数　□ 理科
□ 生活　□ 音楽　□ 図画工作　□ 家庭
□ 体育　□ その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑ 有　□ 無